菅島の両墓制に見る祖霊観(覚え書)

義江明子

＊田中真砂子氏と共同で行った菅島両墓制調査の結果を、祖霊観の考察に絞って簡単に覚え書として以下にまとめた(盆行事の共時的分析、および菅島の村落・家族構造の概要については、本報告書所収田中論文「三重県菅島の盆行事」参照)。なお、菅島の祖霊観の詳細については、拙稿「二つの墓地と二つの寺――菅島の両墓制に見る祖霊観――」(田中真砂子・義江明子科研費報告書『両墓制の展開と家族構造――三重県鳥羽市菅島の場合』一九九二年、所収予定)を参照していただければ幸いである。

菅島には埋墓と詣墓の二つの墓地が存在し、現在に至るまで両墓制が崩れることなく機能している。ただし、通常理解されているような両墓制とは異なり、埋墓は必ずしもステ墓ではなく詣墓も必ずしもマイル墓ではない。こうした両墓制のあり方と、島内の二つの寺の機能とは密接に関わっており、そこから菅島の祖霊観の特質を探ることができる。

埋墓は集落の西のはずれ、〝三途の川〟を挟んだ外側に位置し、手前に六地蔵、背後に供養の経塚という空間配置をもつ。墓地内には中世墓の名残りをとどめる無銘一石五輪塔が多数存在し、慶長の板碑型石塔の存在とも併せて、〝中世末ごろまでに集落共同墓地として成立⬇戦国最末期に至って刻名の供養石塔が村落最上層部から立てられ始める⬇まもなく埋葬地に石塔を立てる動きはストップし、両墓制に移行〟という過程が推定される。両墓制への移行は、詣墓の成立によるものであった。埋墓内部は、現在、家ごとに区画されてはいるが、ごくわずかの例外を除いて、恒久的表示物は何も存在しない、ただの埋葬地である。

詣墓は集落中央の冷泉寺の裏山に位置する。成立時期は、埋墓の慶長板碑型石塔と同一人物の石塔を最古とする点から見て、一七世紀前半と考えられる。石塔が盛んに建立され始めるのは一八世紀後半で、村内での襲名慣行の始まりと強い相関関係が認められ、菅島における家筋観念の一般的成立をそこに確認することができる。ただし、掘り出されたものは自家の直接の先祖でなくても区別なく区画内に据えて祀るという古石塔の扱い、分家に際して古い石塔(最古石塔さえ)から順に分け与えていくという分与石慣行、無銘自然石による分与石の代用などにみられるように、家ごとの区画は決して排他的なものではなく、戒名を刻んだ石塔も個別具体的祖霊のよりしろとしての意味をほとんど持っていない。

菅島には近世を通じて、海福寺と冷泉寺の二つの寺があった。冷泉寺は一七世紀前半に幕府の寺檀政策と関わって成立した曹洞宗の寺で、村の檀家を一手に引き受けている。集落の中央部にあり、裏山の詣墓を管理する、「家」の先祖供養専門の寺である。海福寺は高野山系真言宗の祈禱寺で、檀家を持たない。村の鎮守の八幡宮(現菅島神社)を管理する宮寺でもあった。集落のはずれにあって、聖なる空間(鎮守・宮山)と死の空間(埋墓)双方への出入り口を扼する地点に位置する。埋墓の海福寺区画の古さ、現在に残る鰐口の銘文などから、中世末に集

落共同墓地（埋墓の前身）の墓寺（ないしは土豪の菩提寺）として成立し、死霊供養の役割を担っていたが、先祖供養専門の冷泉寺の成立にともない、悪霊払い・大漁祈願の祈禱寺となったものと推定される。明治初年に廃仏毀釈の嵐に巻き込まれ廃寺となったが、行事は現在も冷泉寺が正確に受けついで行っている。

盆行事の最後を飾るじんじ舟（精霊送り）は、本来海福寺の行事であった。現在の行事の内容は病気等の悪霊払い・虫送り（オイヤレ）だが、一ヶ月にわたる盆行事の中で、埋墓からの霊の迎え・送り、海難者の霊の浜辺での迎えなど、恐ろしい死霊に向かいあう場で焚かれるジン松との名称の共通性、ミハカ（埋墓）送りの間恐ろしい死霊を防ぐためにたたき続けられるカネがじんじ舟の行事でも用いられること、などからみて、本来は埋墓に眠る死霊供養の意味を持つ行事だったと考えられる。

盆の時の先祖供養において、個別の霊、家ごとの「先祖代々」祖霊に対する通常の供養とともに、村単位での集合的祖霊に対する供養も併せ行われるが、村人は後者に対しては強い恐れの態度を示す。この集合的祖霊にはガキも含まれている。菅島におけるガキは、〝正当な祀り手を持たない霊魂＝無縁〟ではなく、〝御先祖様〟の一部である。浄化された個別の祖霊が海から仏壇に迎えられ海に送られるのに対して、祖霊の中の悪霊的要素は埋墓から門内のガキ棚に迎えられて（寺での供養の後）埋墓に送られ、さらに残った悪霊的精霊が最後にじんじ舟で海に流される、という構造をそこに見てとることができる。

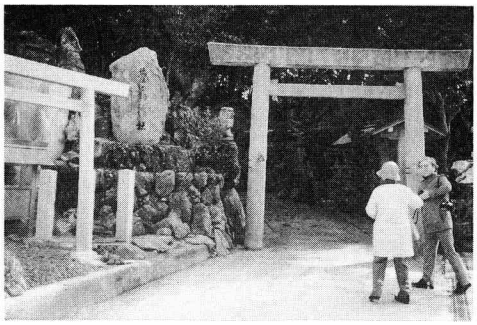
家の一般的成立の後にも、家ごとに区分されきらない集合的祖霊への供養が、〝先祖〟供養として行われ続けていること、ここに菅島の祖霊観の特質を見いだすことができよう。それは、埋墓・詣墓とも、自家区画⬇親類区画のあと、寺・三界万霊碑・殉難教師供養碑・水子・他国者・戦死者など、村に関係する死者の霊には全て詣り供養するという墓参りのあり方にもうかがえるように、家筋・血筋に限定されない、地域という場（村落共同体）に根ざした祖霊観である。

埋墓からの迎え・送りに対して、詣墓での迎え・送りは不明瞭である。村人は、盆の時以外、埋墓だけでなく詣墓にもあまりまいらない。詣墓のマイル機能の希薄さは、埋墓のステ墓性の希薄さと対応し、埋墓の死霊に対する祖霊供養観が濃厚に存在するその分だけ、詣墓の祖霊は盆には影が薄くならざるを得ないのである。また、志摩地方一帯に広がる朝熊（あさま）山信仰が菅島では希薄なのも、古くから一貫して死霊供養を担い続けた海福寺の存在、アサマ信仰と関わる七浜払いなど、島内における祖霊供養の自己完結性との対応が想定できよう。

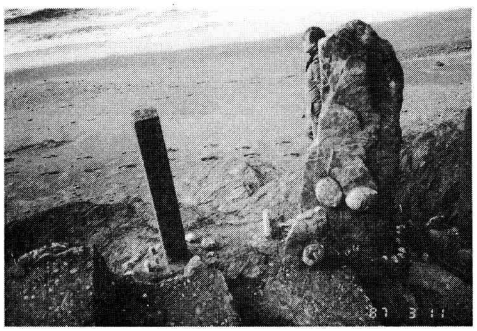
菅島の集合的祖霊観を生み出したのは、中世末にまで遡る地下（じげ）の存在であり、そこに同族集団の欠如、階層制の乏しさ、双方的親族関係の役割、村内婚などが密接に関係し合いつつ、菅島の祖霊観を規定しているものと思われる。さらにその大きな背景としては、「家」を超える祖霊観の普遍的存在を、日本の基層信仰の問題として考える必要があるのではないだろうか。

（国立歴史民俗博物館共同研究員）

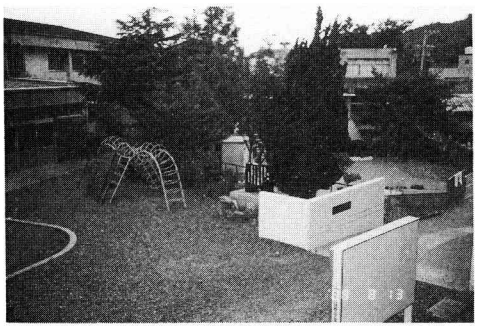
④　集落から白鬚神社に向かう山道の峠にある祭地。「天照皇大神宮」と記した紙札が多数、突きさされてたつ。



①　氏神菅島神社（旧八幡宮）入口。島内各所の社を明治40年に合祀した。鳥居手前左手は鬼子母神。鳥居をくぐって右手には町内各組ごとの石灯籠が並ぶ。

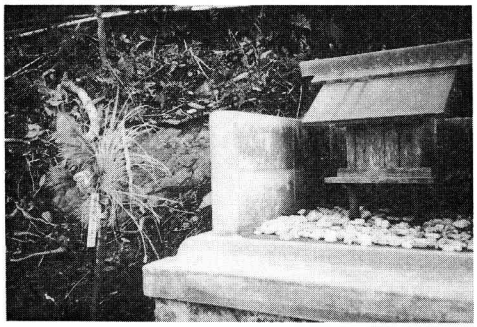


⑤　白鬚神社登り口の鳥居の下に立つ男女石。向こうに見える浜辺が、全島の海女が参加してのアワビの口開け(しろんご祭り)が行われる白浜。祭りで採取したアワビは全て、その年の豊漁を祈って神社に奉納される。

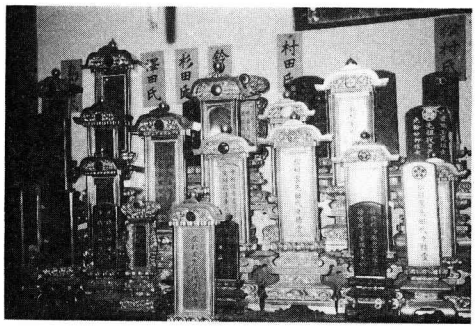


②　保育所から旧海福寺庚申堂の屋根（右端の木の蔭）をのぞむ。道路を挟んで右手が菅島神社。かつて海福寺境内で行われていた正月の弓行事は、現在もこの保育所の庭で行われる。

⑥　島の北東端の岬の山頂に立つ白鬚神社社殿。海上はるか後方に伊勢神宮を望む。山裾付近には小円墳がある。

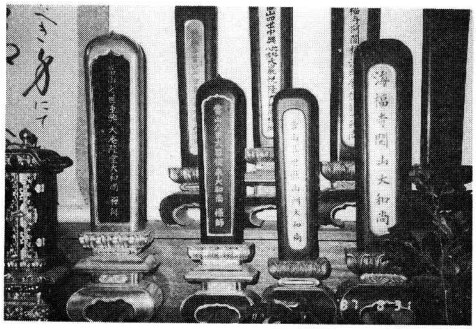


③　集落南方。山の畑への登り口にある小祠に立てられた蘇民将来札「蘇民将来子孫」。



⑩　冷泉寺本陣奥にある位牌堂の左側。各家の「先祖代々精霊」位牌が姓別に並ぶ。

⑦　冷泉寺境内入って右手の阿弥陀堂。旧海福寺の本尊を安置する。手前右は、老年を福海寺で過ごしたとされる高僧光雲の五輪塔。明治初年建立。旧海福寺境内から堂と共に移された。左の建物は庫裏。庫裏の右横から裏山にかけて詣墓（カリミセ）が広がる。

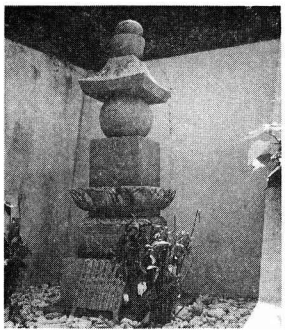


⑪　位牌堂正面右側。海福寺と冷泉寺の歴代住職の個別位牌が並ぶ。

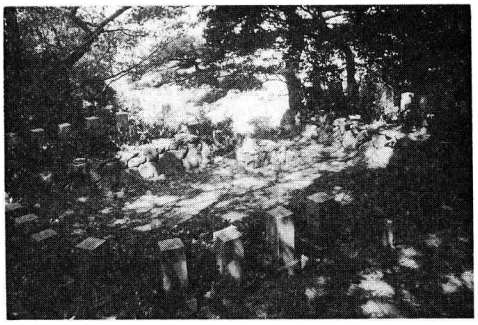
⑧　冷泉寺境内左手の地蔵堂。かつての本尊＝地蔵菩薩を安置する。現在本堂にある本尊＝釈迦如来は、天保年間の中興開山光輪大和尚の時からのものという。地蔵堂の右は旧薬師堂。そのさらに右横に、以前は念仏婆さんの籠り堂があった。

⑫　詣墓の最上部、無縫塔がたちならぶ寺区画。正面が冷泉寺住職の区画で、右側が旧海福寺住職の区画。海福寺区画の石塔は海福寺境内から移されたもの。慶安4（1651）年の板碑型石塔のほか、一石五輪塔もある。冷泉寺区画には延宝3（1675）年の仏像碑型石塔を最古として無縫塔がならぶ。

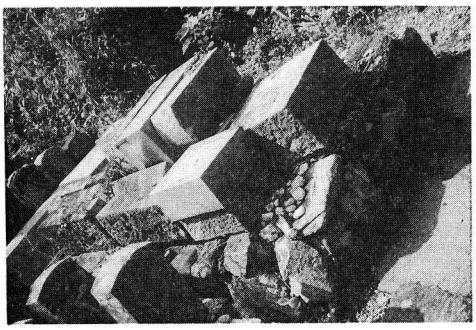
⑨　地蔵堂左横の地蔵たち。盆行事の際には村人が紙包みのボタモチを供える。「奉供養西国三拾三所順礼観世音菩薩惣地下中、元禄八乙亥年」の石柱も立つ。



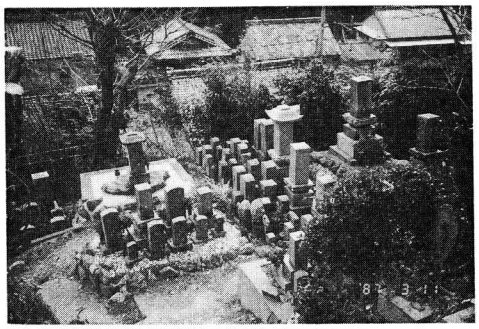
⑯　冷泉寺の家区画。大五輪の家石塔1基だけがたつ。地中に何も埋めない一般の区画と異なり、ここにはツメ・髪の毛を埋める。



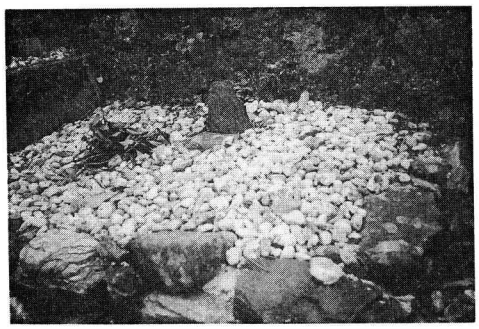
⑬　寺区画の一段下の兵隊墓区画。かつてはここが寺区画だったが、戦死者の増大にともない、寺区画を上段に移し、拡張して兵隊石塔38基をたてた。盆の時には村人全員が寺区画の石塔と共にここの全石塔にも水かけをする。



⑰　石塔を横積みにして整理した絶家区画。

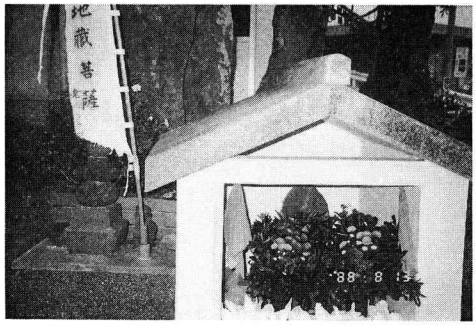


⑭　詣墓中心部の銀四郎ヤ・兵二郎ヤ区画一帯を上から見下ろす。板碑型・丸兜型の古石塔が林立する前に、新しく方柱型・位牌型の家石塔がたつ。手前、登り口の木の根元には仏像碑がある。

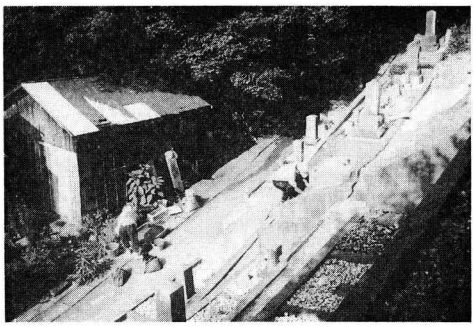


⑱　分家のための新区画にたてられた自然石の立石。まだこの家の死者のための石塔は存在しないが、立石に対してシキビと線香の手むけが死者の石塔に対するのと同様になされる。

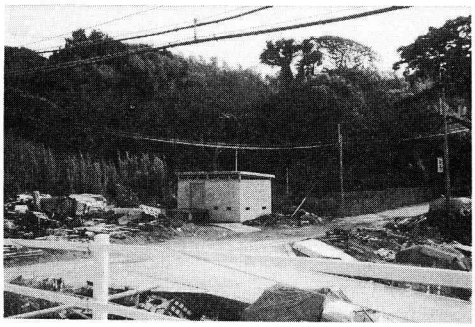
⑮　古い石塔を横積みに片づけた前にたつ、新しい家石塔。右の区画の奥には明暦年間の禅門＋童女の連名板碑型古石塔、左の区画奥には慶長年間の禅定門＋禅定尼連名の板碑型古石塔が見える。



㉒　支所前の榎地蔵。盆のボタモチの紙包みが多数供えられている。左手に見えるのは組み合わせ五輪と一石五輪の供養塔断片。埋墓から出土したものを、島内の供養関係の要所に適宜据えてあるのだという。冷泉寺住職が葬列と共に来るのはこの地蔵前まで。

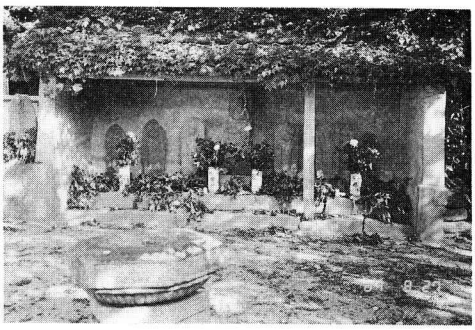


⑲　増加する分家のために新たに拡張造成中の新区画域。家石塔だけの区画も多い。

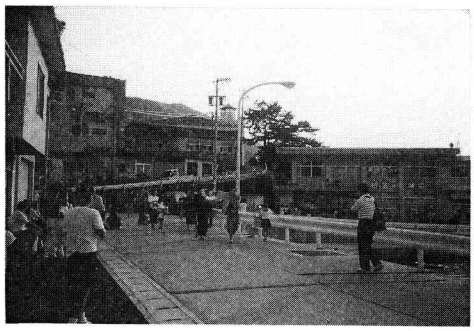


㉓　集落のはずれから埋墓を望む。右手は浜辺。かつて右方やや高台に一石一字の経石を埋めた経塚があったが、大津波に洗われた後、埋墓後方の山頂（地字名経塚）に移されたという。

⑳　新区画にたつ分与石。分家に際して本家の古い石塔を1基分けてもらう習慣による。まだこの家としての死者の石塔はない。

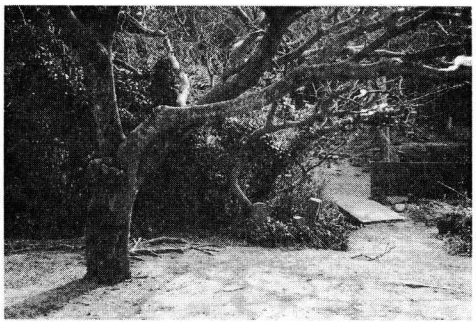


㉔　埋墓手前広場左手の六地蔵と広場中央の棺台。埋葬に先立ち、棺を台の上に載せて三回廻す。六地蔵左横は「南無阿弥陀仏」の六号名字碑。右横は葬具捨て場。盆の泣き施餓鬼の後、新亡灯籠の紙をはがしてここに埋める。六地蔵は以前は旧口の島道沿いの学校下浜辺にあったという。



㉑　集落から埋墓（ミハカ）へ至る口の島道（正面右手に上がっていく道）。道の向こうは旧海福寺跡地に立つ農協・支所・町内会の建物。右手に見える松の根元に、かつては後産を入れるツボが埋めてあり、旧口の島道はそこから浜辺に下って埋墓に至っていた。遠景は、盆のシキビ採りに行く島内最高の大山。

㉘　橋を渡り、埋墓中央部を望む。積み上げられた石の数が、古くからの区画であることを物語る。中央が旧海福寺住職の区画で、右手前は島内でもっとも古くからの家筋とされる銀四郎ヤの区画。

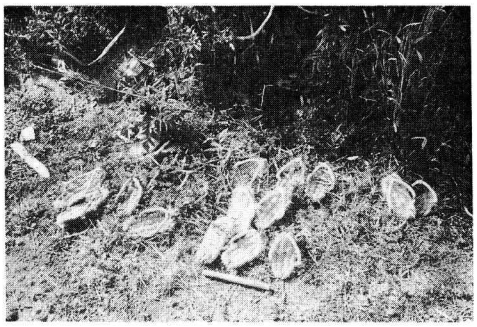


㉕　広場から小川（三途の川）に架かる橋を渡ると埋墓。橋の手前左側は海難などによる他国者の埋葬地。盆の時にはここにも全戸の村人がシキビを手むける。

㉙　銀四郎ヤ区画にたつ五輪塔浮き彫りの板碑型古石塔。正面両脇に「慶長3年6月廿日月桂妙光尼」の銘がある。埋墓にたつわずかな石塔類の中の最古のもの。⑮の詣墓の慶長板碑型石塔の禅定尼と同一女性である。

㉖　橋手前右側の水子埋葬地。盆の8月16日（ミハカ送り）なので、全戸の村人の手むけたシキビが山のようにつまれている。

㉚　橋を渡って右側。大津波に洗い流された後に設定された分家のための新区画。平たい自然石の区画が砂地に消え入りそうに見え、区画中央には表示の平石・立石だけが見える。その区画の埋葬者がまだ存在しなくても、盆の時にはこの立石・平石にシキビ・線香を手むける。かつては墓地を囲む石塀はなく、大波の洗うに任されていた。

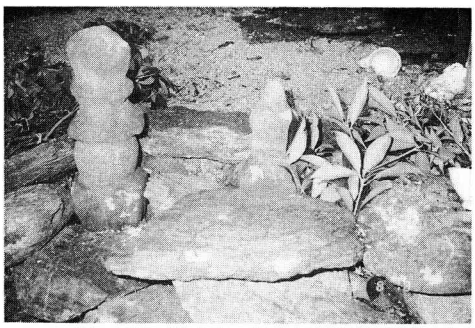


㉗　橋の袂に脱ぎ捨てられたワラジ。埋葬が終わった後、ここに全部捨てていく。

㉞　冷泉寺の寺区画。ここにはツメや髪を入れる。他の区画と異なり供養の石塔がたつ。真新しい木製灯籠は1989年に亡くなった前住職のためのもの。背後には朽ちるに任された木製灯籠の林立するさまが見える。

㉛　新区画の最初の埋葬者を示す立石と膳石。その後、新しい埋葬者が出る度に新しく立石と膳石を据える。旧膳石は横によけて区画石に転用し、旧立石は位置をずらして再びたてるので、古い区画ほど、区画石が崖のように積み上げられ、区画内部には立石が林立することになる。

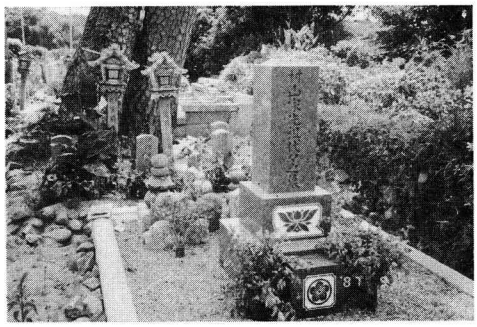
㉟　冷泉寺の家区画。住職の遺体はこちらに埋葬する。供養の石塔と仏像碑がたつ。



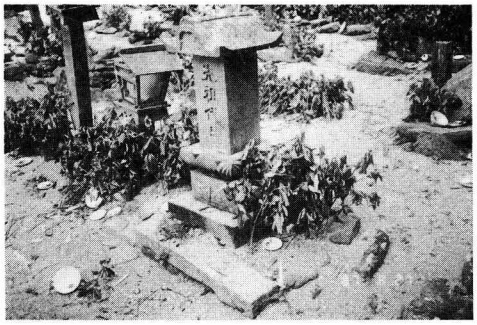
㉜　埋墓の区画内に散在する一石五輪の供養塔。波に洗われて磨り減っている。砂中から掘り出された場合も多く、現在位置する区画との関係は不確かである。埋墓全体で残欠も含めて61基存在する。

㊱　三界万霊碑。大津波で墓地の一部が流された際に出土した人骨などをここに収めた。明治23年の建立。

㉝　埋葬に際して親類がたてる２本の木製灯籠。手前の膳石の上には逆さ膳が据えられ、７本塔婆、戒名を記した木の卒塔婆も見える。これらのものは自然に朽ちるに任され、これ以外に埋葬者を示す（石塔等の）恒久的表示は、数ヵ所の区画を除き、何もない。

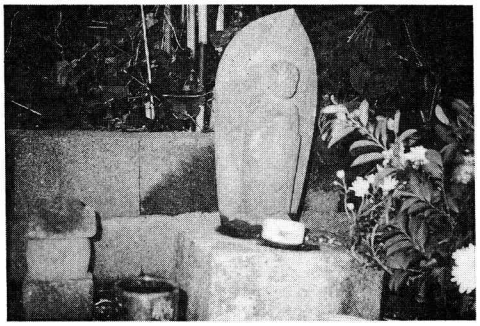


㊵　同じく相差の（旧）埋墓。集落後方の高台にある。菅島と同形式の一石五輪の供養塔50～60基、板碑型古石塔40～50基のほか、多数の個人石塔がたつ。「先祖代々」の家石塔もわずかながら立ちはじめている。

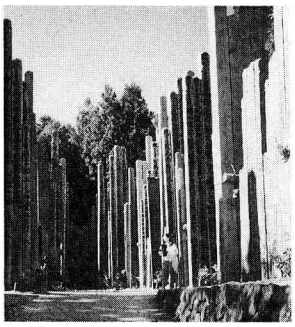


㊲　埋墓に2基だけたつ「先祖代々」の家石塔（昭和9年と昭和33年）のひとつ。こうした家石塔を埋墓に建立する動きは、菅島ではごく例外的で、その後も広まっていない。

㊶　同じく国崎の埋墓。集落はずれの山の中腹にある。自然石またはブロックで長方形に整然と区画し、区画中央に屋号による家石塔がたつ。



㊳　埋墓を囲む塀の外側に道路に面して設けられた地蔵。水難児童を救おうとして殉職した小学校教師（島外出身）のための供養碑である。盆のミハカまいり・ミハカ送りの際には、全戸の村人が詣って水かけをする。ここにも一石五輪塔の残欠が置かれている。



㊷　朝熊(あさま)山の巨大木製塔婆。死者の遺品の帽子などが掛けられている。朝熊山は霊魂の帰っていくところとして志摩一帯の信仰を集めているが、菅島から奉納された塔婆はごく少ない。

㊴　菅島の鳥羽側対岸、石鏡の埋墓。集落のはずれの高台にある。ほぼ正方形の区画に石を積み上げコンクリートで固め、上部もコンクリートでふたをする。菅島と異なり、屋号を記した家石塔が1基ずつかならずたつ。